十三夜のお月見

「ほっとやまはく」タイム㊿

月齢13の月（2021年撮影）

先月9月29日は中秋の名月でした。天気にも恵まれ、皆さんは、おいしい月見団子を食べながらお月見をされたのではないでしょうか。県立山口博物館でも中秋の名月の観望会を実施し、多くの人にお月見をしていただきました。

中秋の名月の風習は、平安時代ごろ中国から伝来したもので、旧暦（太陰太陽暦）の8月15日に見える月のことです。15日なので「十五夜」とも言われています。でも、秋の月を観賞するお月見の風習は、十五夜だけでなく「十三夜」という日本独特の風習もあります。この十三夜について紹介します。

十三夜の由来

十三夜は旧暦の9月13日に見える月のことで、十五夜に次いで美しい月とされています。十五夜は、農作業に従事する人々が、欠けていない満月を豊作の象徴とし、月の神様に豊作を願います。一方、十三夜は稲作や野菜の収穫を終えることから、秋の収穫に感謝しつつ美しい月をめでます。昔は、十五夜と十三夜を合わせて見ると縁起が良いとされていました。この十五夜や十三夜は旧暦による日付です。旧暦は太陽の動きと月の満ち欠けを用いて暦を計算し、毎月新月を1日として数え始めます。新月から数えて、14～16日目ごろが満月になります。十五夜は満月、もしくは満月に近い月が見られますが、十三夜は少し欠けた丸くない月が見られます。

9月29日の中秋の名月観望会の様子（山口博物館屋上で）

十三夜はいつ？楽しみ方は？

それでは、現在の暦（太陽暦）で十三夜はいつでしょうか？　今年は10月27日になります。現在使われている暦では、毎年同じ日にやってくるとは限りません。

中秋の名月には別名「芋名月」がありますが、十三夜にも別の言い方があります。この時期は栗や豆が収穫できる時期なので「栗名月」「豆名月」と呼ばれます。また、十五夜に次いで美しく、十五夜のすぐ後にやってくるので、「後（のち）の月」とも呼ばれています。

お月見といえば月見団子。十三夜の場合は13個のお団子を用意して並べます。合わせて、収穫された栗や枝豆、大豆をお供えし、秋の実りに感謝します。そして、収穫物と共に、ススキを飾ります。ススキの鋭い切り口は魔よけになり、茎の内部が空洞のため神様の依り代（よりしろ）と考えられていました。地域によってはお月見に飾ったススキを捨てず、庭や水田に立て、災いから田や家を守る風習もあります。

十三夜のお供え物（クリ）

終わりに

十三夜について解説しました。いかがでしたか？　古くから日本では、四季折々の自然を感じて暮らしてきました。秋の澄んだ空気の中、きれいな月を見上げて、秋の実りに感謝するのがお月見の風習です。今年は月の他に、木星も明るく輝いています。空を見上げ、心休まる時間を過ごしてみてはいかがでしょうか？　27日はぜひ十三夜のお月見をお楽しみください。

岩村和政（天文担当学芸員）

▽次回は11月8日です。

山口県立山口博物館
ＴＥＬ083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。最新情報はホームページで